「伝統と創意」

公益社団法人 日本書芸院

広報紙 書くよろこび 第5号

〒540-6591
大阪市中央区大手前1丁目7番31号
OMMビル7階
TEL 06-6945-4501 FAX 06-6945-4505
Eメール info@nihonshogeiin.or.jp
ホームページアドレス
http://www.nihonshogeiin.or.jp/
平成23年（2011年）2月発行
編集・発行人
公益社団法人 日本書芸院 理事長
井茂圭洞

無 料

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。

美しい心は手書き文字から

一、日本の伝統文化芸術を守り育もう
一、すばらしい日本語の心を伝えよう
一、心を映す文字をより大切にしよう
一、書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
一、美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう

寄稿

子ども時代に書く習慣を

文部科学省
初等中等教育局長
山中 伸一 氏

昨年は、映画「書道ガールズ!!―わたしたちの甲子園―」がヒットし、書道や書道パフォーマンスが高校生、特に女子高生の間に広がってきています。〃女子高生が書道で町おこし〃と、地元テレビ局で取り上げられた紙づくりの町、愛媛県四国中央市の実話を映画化した感動作です。書家、紫舟氏の書いた、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」の題字も話題になりました。書道は子どもだけでなく、大人の間でもブームになってきています。

ただ、残念ながら、大人になってから、ペンや筆で文字を書くことが少なくなりました。ワープロで文章を書くことが増え、年賀状も手書きのものが少なくなってきました。

「読み、書き、そろばん」と言われるように、書くことは生きていくことの基本です。今こそ、子どもの時代に文字を書くことの習慣をつけることの重要性が増しているといえます。文字は人に気持ちを伝えるだけでなく、その人の心の有り様が映ります。心を映す文字を大切に育てる。美しい文字で豊かな人生を送る。日本書芸院が取り組んでこられた「手書き文字の振興」が、書道に対する関心の高まりの中で、見直され、多くの人にしみ渡っていく時代になっています。

私も小学校に上がる前から近所の文房具店でやっていた習字教室に通わされました。先ず墨をすり、紙を広げ、文鎮で押さえ、姿勢を正し、習字を始める。このような日本の日常的であった光景、今は社会から失われてしまった光景が、全国の小学校、中学校で行われています。教室にパソコンや電子黒板が入ってきましたが、鉛筆と消しゴムが入った筆箱とともに授業が行われる光景は昔も今も変わりません。

今年の四月から小学校では新しい学習指導要領が全面実施されます。

小学校においては、文字を書く基礎になる姿勢、筆や鉛筆の持ち方、点画や一文字の書き方から始め、文字の集まりの書き方、目的に応じた書き方へと指導し、日常生活や学習に生かせる書写の能力を育成することとしています。文字を正しく書くためには、特に毛筆を使用した書写の指導が重要です。筆圧に注意をすることや、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くことを取り上げています。

また、中学校では、楷書や行書の特徴を踏まえ、書体を選択して書くことができるようになることを目指しています。

高校の芸術科書道では、生涯にわたり書を愛好する心情を育てることや、書の伝統と文化について理解を深めることを目標に加えました。

学校教育の取組と並行して、日本書芸院主催の「手書き文字ばんざい！」のイベントや書道展の開催は、書の伝統文化を発達させる上で大きな役割を果たしています。

手書き文字にこそ魂が宿る。公益社団法人日本書芸院が、書の楽しさ、すばらしさを発信し、より多くの人が書に親しみ、書く喜びを次の世代に引き継がれることを期待します。

文字・活字文化振興法の骨子

【目的】
文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。

【基本理念】
国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵沢を受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤であることに配慮する。学校では「言語力」をはぐくむ。

【責務】
国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。

【地域での振興】
市町村は公立図書館を設置する。国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

【国際交流】
文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。

【文字・活字文化の日】
国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

キャンパスから

将来の書道界を担う若者たちが学ぶ、大学の書道学科、書道コース。各校が個性を生かし、創造的な教育に取り組む。「全日本高校・大学生書道展」などで、常に上位に顔を並べる京都橘大学、奈良教育大学、大東文化大学の３大学を訪ね、ハイレベルな教育の背景を探った。

個性、多様性を育む

京都橘大学

全日本高大展　7年連続最優秀校

日本書芸院と読売新聞社が主催する「全日本高校・大学生書道展」で平成15年から7年連続して「団体賞・大学の部」の最優秀校に選ばれた京都橘大学。京都市山科区の小高い丘の上にたたずみ、都心の喧騒から離れた静かなキャンパスだ。

学生を指導する新谷教授

同大学には文学部日本語日本文学科書道コースなど、４学部・8学科・16コースがあり、教学理念は「自立」「共生」「臨床の知」。多様な個性、多様な生き方を目指す学生を育んでいる。書道コースも、そうした教学理念のもとに平成4年に創設された。１学年25人の少人数で、アットホームな雰囲気のもと、学生らが研さんを重ねる。

専任教員は横山弘平（煌平）教授（書学書道史）、新谷泰一（泰鵬）教授（書法〈漢字〉、書道史）。日展などで活躍する書家も非常勤で指導する。

横山教授は7年連続で最優秀校に選ばれた理由を、「少人数に徹することで、質が高くなった。また、書道史や書道周辺の文化を幅広く勉強していくカリキュラムがしっかりしているので、学生たちが自分に合った書を見つけ、作品として創造できる力を身につけた」と分析する。

夏休みが終わって本格的な作品作りに入った10月、４年生の卒業制作の授業をのぞいてみた。

新谷教授の授業では、教室の壁に、それぞれが書いた漢字の六曲屏風の作品を貼って、みんなで批評し合った。レーザーポインターを片手に持った新谷教授が文字に光を当て「そっくりに書く必要はない」「もうちょっと太めに書こう」と丁寧に指導する。学生も「全体に重たいなあ」「文字の中の白をきれいに出したい」と、狙いや反省点を素直に口にする。飾り気のない言葉のやりとりが、教員と学生との絆の強さを物語る。

仮名作品の批評を受ける学生。メモを取るなど真剣だ

横山教授は廊下を隔てた向かいの教室でかなを指導していた。手に持っているのは鉛筆。「筆を持って、朱を入れるようなことはしない」という。鉛筆を動かしながら、「出足から古典を無視している。だから文字の噛み合わせがつかめない」「うまく調和させたい。けんかしたら仲良くできない」。一言、一言に学生がうなずく。

時には「いざ創作になった時、応用が利かんとだめだ。社会に出ても同じや……」と厳しい。そして、「まず古典を徹底して学ばせる。本格的な創作力を養成して、本当に分かったか、学生に考えさせ、感じさせる。自分でしっかりと自立してもらう。自分の字を一生涯いくらでも変えていけるような融通性も養いたい」と語り、型にはめることをやめ、自主性を尊重する。

高いレベル　学生同士刺激に

森内さん

両教授の指導を受ける4年生。森内彩さんは三重県熊野市出身で、「全日本高校・大学生書道展」での実績にあこがれて、進学した。「本格的に書道を学びたいと思って、凄い先生がいる京都橘大学へ進みました。先生だけでなく学生のレベルの高さにも驚きました」と振り返る。

学生同士が互いに作品を自由に批評し合う授業にも、創作意欲を刺激された。「自分でも気づかなかったことを同級生にたくさん指摘され、いい励みになった」と、橘の校風が合ったようだ。一般企業への就職が決まったが、「チャンスがあれば、教職にも挑戦し、一生、書道に関わっていきたい」と話す。

荻野由貴菜さんは、京都府京丹後市出身。高校3年の夏休みにオープンキャンパスで横山教授と出会った。自主性を重んじる指導にふれ、感銘を受けた。1、2年生で書の基礎をしっかりと身につけ、今は王鐸（1592－1652）の古典を基本にした創作に励む。

荻野さん

4年生の1年間は卒業制作に追われる日々。「自分ではまだ書き込みが足りないと思っている」と掲げるハードルは高い。将来、高校の国語教諭になりたいという。

専念できる環境　中国で研修も

校門をくぐってすぐに「管理・特別棟」がある。この棟には書道関連の教室が並び、書道コースの学生が理論や技術を学ぶ拠点となっている。

書法（実技）の授業は主に3階の教室で行われ、文鎮、硯、毛氈を完備。授業のない時間にも、学生は教室を使え、やる気さえあれば、いつでも練習できる。

自宅を離れて一人暮らしする「下宿学生」には、重宝がられるのが「和室」。主に卒業制作に励む4年生が使用しており、夜遅くまで明かりが灯る。学友に刺激を受け、互いに切磋琢磨したり、教員の指導を仰いだり、と自己を磨く場にもなっている。

中国書道ゆかりの地を訪ねる「書道コース中国研修」を原則、隔年ごとに実施。北京・曲阜・西安などを約10日の日程で訪ねる。

書法系の必修科目（京都橘大学のHPより）

書法Ⅰ・Ⅱ（漢字）
欧陽詢ら中国・初唐の三大家の楷書の書美、書法を理解し、表現力をつける

書法Ⅲ・Ⅳ（かな）
臨書を基本としたかな書法の研究

研究入門ゼミⅠ・Ⅱ
書とは何か、書の性格と特質など書を学んでいくための様々な方法や問題について総合的に学ぶ

漢字古典研究Ⅰ
漢字古典の鑑賞と書法解明。文字発生から魏・晋・隋・唐代まで

漢字古典研究Ⅱ
漢字古典の鑑賞と書法解明。唐・宋・元・明・清代、日本の漢字名跡

かな古典研究Ⅰ
奈良時代から女手が完成する時代まで

かな古典研究Ⅱ
院政時代から江戸時代まで

書法Ⅴ・Ⅵ
基本的な行・草書法の習得。王羲之の臨書など

書法Ⅶ・Ⅷ
臨書を中心とした日本のかな書法の研究

卒業制作Ⅰ・Ⅱ
古典の臨書を通じて得た基礎的な技術をもとに、創意を加えた漢字作品を創作

卒業制作Ⅲ・Ⅳ
研究対象の古典を定め、多様な表現技法で創作する

卒業制作展は博物館で公開

書道コースの卒業制作展は毎年２月に京都文化博物館などで一般公開される。卒業制作集も図録にして発行される。

キャンパスから

伝統と創造の融合

奈良教育大学

精鋭集う名門

奈良教育大学のキャンパスがある奈良市高畑町界隈は古都らしい風情を湛える〝奈良通〟の名所だ。近くには、国宝・十二神将立像で有名な新薬師寺、文豪・志賀直哉旧邸がたたずみ、界隈を歩くだけでも、清冽な気分に浸れる。キャンパスには、奈良公園のシカも顔を見せ、学生と戯れることがある。そんな、ゆったりとした、落ち着いた環境のもと、総合教育課程の文化財・書道芸術コースの学生が学ぶ。

卒業制作に取り組む4年生

同コースは「古文化財科学」「文化財造形」「書道芸術」の3専修に分かれ、書道芸術専修は1学年15人。京都橘大学よりも、少数精鋭だ。この学生数で「全日本高校・大学生書道展」の団体賞でも毎年、トップ争いを演じている。過去に特別設置課程（書道）があり、「東の東京学芸大学」、「西の奈良教育大学」と並び称された名門中の名門だ。

指導教員は福光佐今（幽石）教授＝写真右＝（漢字書法全般）、吉川美恵子教授＝同中央＝（仮名書法全般）、豊田宗児准教授＝同左＝（漢字書法、古典文字、篆刻）、谷川雅夫特任准教授（書道史、書道理論、書道教育）。

大家の作品並ぶ和室

学生が書作にふける和室を訪ねた。広さは約50畳。壁面には同大学ゆかりの小坂奇石、梅舒適、谷辺橘南、炭山南木、松井如流、辻本翔鶴といった大家の作品がさりげなく飾られ、壁面を見ただけでも圧倒されそうになる。こんな作品を毎日、目の前にしているだけでも、無意識に書道への美意識が養われそうだ。部屋には墨の匂いがほのかに漂い、ここで、4年生が卒業制作に取り組んでいた。

福光教授は「大小2つの和室があります。和室に泊まり込んで制作に打ち込みます」という。4年生の卒業制作は漢字とかなを書き上げ、漢字作品は「2×8尺作品6幅」、かな作品も同程度の大きさの作品を書く。「卒業書作展」は毎年、奈良県文化会館で開かれる。福光教授は「1学年わずか15人なので、出展数が少ないように思われるが、実際は展示室がいっぱいに埋まって、迫力がありますよ。うちの学生のレベルの高さを見てやってください」と卒業書作展の質には自信を持つ。

作品発表に打ち込むのは4年生だけではない。学内のホールでは各学年ごとに「回生展」を開催している。一方、教員、OB、現役学生ら約100人の力作を一堂に披露する「奈良教育大学書道展」（県文化会館で開催）は圧巻で、伝統の力を見せつけ、発表活動にも意欲的だ。

新しい書法幅広く研究

将来に向かっての可能性を探るのも書道教育の大きなテーマだ。文字を一つの「図形」として捉える発想で、各種用具を用いた書法を幅広く研究する。新しいメディアでの活用を考えることも必要だ。面白いのが「文字図形論」。扁、旁、冠、脚を観察しながら、線の伸ばし方やハネ方など形の変化を考える。

例えば「木」が二つ並ぶ「林」。同じ形の場合は右側を広げると美しいし、バランスが取れる。「竹」も同様だ。縦線、横線、すき間の広さにもすべて法則がある。この法則を理解すれば、文字の美しさを感じることもできるという。福光教授は「線の方向を読めば、絵画にも通じるものがある」といい、現代芸術との接点も視野に入れる。

フレンドシップ事業「書道を楽しもう」も実施。近隣の小・中学校の児童・生徒とともに書道を楽しむ。将来、教師になる学生が多い、教育大学ならではの取り組みだ。

また、将来、教壇に立つ先生の卵たちのために平成24年度から「板書」教育も計画。「板書特講授業」は「体育」や「外国語」の授業のように、全国初の学生全員の必修授業にする。理系など普段、書道に携わらない学生も、教壇に立つ以上、整った字を正しい筆順で黒板に書けるように指導していくという。

筆、墨を育んだ文化と土地柄

同大学の書道を側面から支えるのは奈良の文化と土地柄。植物油を燃やしてススを採る「南都油煙墨」は藤原氏の氏寺、興福寺二諦坊で室町時代頃に始まった。松のススで作る「松煙墨」に比べ、墨の黒さは格段の差があり、奈良の墨は一躍全国ブランドになった。

江戸・寛文年間（1661～73年）には奈良町に30軒近い墨屋があったといわれる。その伝統は現代にも根付き、奈良は全国の製墨業のほとんどを担っている。このため、墨の製作過程を見学したり、体験したりすることも可能で、墨や書を身近に感じることができる。

また、奈良は古文書の宝庫でもある。正倉院をはじめ、数多くの寺社、国立博物館などの施設があり、学生時代から古典資料にふれる機会にも恵まれている。

国際交流事業 海外に書を紹介

伝統文化の殻にとらわれず、海外に書を紹介する取り組みも盛んだ。書道芸術専修の学生は国際交流基金中学高校教員交流招聘事業の一環として、外国の教員を対象に、毎年「書道体験教室」を開催している。平成21年はラオス、イラン、ハンガリーなど13か国、22年は4か国13人の教員に英語で書道レッスンを行った。

筆の持ち方、線の書き方、字のバランスなどの基礎だけでなく、書道の美しさも伝えた。参加した外国人教員の一人は、自分の書いた作品の1枚を自宅に、もう1枚を勤務する学校に飾りたいと言っており、好評だ。

学生企画事業として認定されたグループ「YAMATO」は、オーストラリアで約1週間、現地の小・中学校やメルボルン大学、日本語学校で英語で教えた。漢字や日本文字を使わない国にもかかわらず、小学校の子どもたちは「花」「飛」「空」「命」など思い思いの字を完成させた。

大学院でも中国、韓国、ロシアなど海外留学生を受け入れている。ロシアのヴィノグラードワ・ダリアさんは新聞に書道パフォーマンスを取り上げられるなど国際色も豊かだ。

福光教授はこんな思い出を語る。「体の大きな外国人男性が筆を持った。書けるのかなと心配したが、ある人が『ダンスを踊るつもりで』と、ヒントを与えた。すると、ものすごく繊細な線で書き出した。なるほどと、参考になった」という。国際交流の思わぬ副産物だ。

学びの領域

「実技」「教育」「書道史・書道理論」の3つを柱にしている。

＊実技は漢字・仮名・篆刻を中心に学ぶ
＊教育は芸術科書道の教育に精通した教員になることを目指し、書道の教育内容や指導法を学ぶ
＊書道史・書道理論は、中国・日本の書道史、書法論、書道が社会に果たす役割などを学ぶ

主な開講科目

楷書法、行書法、草書法、古筆論、漢字造形論、仮名造形論、漢字創作法、仮名創作法、漢字作品研究、仮名作品研究、篆隷書法、篆刻法

キャンパスから

全国最大の書道学科

大東文化大学

木々が色づき始めた11月、大東文化大学文学部書道学科の3・4年生が学ぶ板橋キャンパス（1・2年生は東松山キャンパス）を訪れた。書道の教室、研究室がある3号館の屋上では、直径約2・6㍍のプロペラが勢いよく回っていた。エコキャンパスを実践する同大学の風力発電施設だ。人と環境に優しい都市型キャンパスを提唱しており、太陽光発電や屋上緑化、中庭緑化も施され、都心にあっても、自然の移ろいを感じる。そんな環境のもとで、学生らが書に打ち込んでいた。

「イメージを湧かせて」と指導する斎藤教授

書道教育　戦前から定評

同大学の出発は帝国議会で可決された「漢学振興ニ関スル建議案」に基づいて大正12年（1923年）に創設された大東文化協会。漢学を中心とした東洋文化の研究は長い歴史を誇る。書道教育も戦前から定評があり、教育現場にも多くの人材を輩出してきた。

墨継ぎについてアドバイスする高木厚人教授

学生1学年60人　専任講師も充実

文学部書道学科として新設されたのは平成12年。1学年の定員60人で、書道系としては最大規模だ。専任教員も▽安達直哉（書跡文化財学）▽河内利治（書道学／美学・芸術学）▽河野隆（篆刻）▽斎藤公男（漢字仮名交じりの書）▽澤田雅弘（中国書道史／中国書学）▽高木厚人（仮名）▽古谷稔（日本書道史／日本書学）の教授7人をはじめ、▽星弘道・特任教授（漢字）▽高木茂行・准教授（漢字）▽高城弘一・同（古筆学／日本書道史）▽日賀野琢・講師（漢字）ら計11人がそろう。

ゼミは鑑賞、研究力を養う「書学」と、書作家としての技法を習得する「書作」の2コースがあり、どちらかを主ゼミ、副ゼミに選んで、並行して学ぶ。

斎藤教授の授業では3年生がゼミ展への出品作に取り組んでいた。斎藤教授は「ロマンティックな恋愛映画を思い浮かべなさい。一字一字にストーリー性を持たせて」とイメージを湧かせながら指導する。

高木厚人教授の授業では学生の作品を教壇の壁に貼り出し、一点ずつについて、「筆が寝ている。墨継ぎが多いとポテッとする」「広がっていくと、ゆったりと感じられる」などと、創作のヒントを与えていた。

学生がパソコンを使って発表するのは河内教授の美学・芸術学。河内教授は「パソコンで論文を書いたり、映像を用いたり……。学生が新しい方向性を考えるようになれば」と話す。

実際の作品見る　国内・海外研修

学生が楽しみにするのは「書道文化演習1・2」。国内、海外研修がある。前期は東京、京都、奈良の博物館、寺院などを訪ねる研修旅行を実施。博物館や社寺で書の作品にふれ、墨の濃淡、筆勢、紙などを間近に見て、作品の背景を考える。後期は中国美術学院（杭州）か国立台湾芸術大学（板橋）で約1週間の研修がある。現地の教員らに書・画・篆刻を教えてもらう。

制作風景

書芸術の将来像　筆先に見据え

大東文化大学 ▲

パソコンを使った河内教授の授業

▲ 奈良教育大学

上 古典の字を研究。自分の字に工夫していく

下 伝統の和室で創作に励む

京都橘大学 ▶

自分の作品を壁に貼って批評し合う

キャンパスから

学科主任 河野隆教授に聞く

「書との接点」は生涯

大東文化大学の学科主任・河野隆（鷹之）教授に、これからの書道や課題などについて伺った。

かつては、庶民の基礎学力を「読み、書き、そろばん」にたとえ、私が子どもの頃は習い事といえば「習字」だった。ところが、近年、パソコンや携帯電話のメールの普及などで、底辺の文字文化が大きく変わり、習い事の質も変わってきた。また、児童、生徒数の減少などもあり、書道展などへの出品人口が減ってきている。それで、書道人口は減少傾向にあるとも言われている。

ただ、書道人口を書写活動の人数だけで、とらえていいのだろうか。私は鑑賞も含めて「書との接点」という大きな枠で、今一度、書道文化をとらえた方がいいと思う。

私が学んだ神奈川県の高校（横浜翠嵐高）は、全校生徒が毎年、東京で「日展」を見学するのが恒例となっていた。私は展覧会場の陳列ケースに並んだ篆刻作品に深い感銘を受けたことを今でも、忘れない。別の日に一人で再び出向いて、半日、篆刻だけを観た。二世中村蘭台の木印が私の中に、飛び込んできた。強烈なオーラを感じた。それで、専門の本を読みながら、高校時代に約30本の篆刻を作った。

横浜国立大教育学部美術科へ進み、3年になる直前に、篆書、篆刻の集中講義があった。この時、非常勤講師で来られたのが、二世中村蘭台の子息の中村淳先生。私は蘭台調を意識して「鐵牛」という文字を彫って、先生に激賞された。

卒業も近づいてきたが、当時は大学紛争のまっただ中。ストライキが続き、私はアルバイトに明け暮れ、何をしに大学へ来たのかと、自分自身に嫌気が差していた。そんな時、高校時代に観た篆刻への感動、中村淳先生に褒められたことなどの印象がよみがえり、忘れかけていたものを呼び覚ましてくれた。それで、自分の進むべき道が決定した。

油絵を描いたことはないが「洋画ファン」、小説を書いたことはないが「小説ファン」という人はたくさんいる。街の看板、旅先の旅館の床の間に飾られた掛け軸など、鑑賞の目を養えば、文字とふれあえる機会はどこにでもある。文科省の新しい学習指導要領にも、「生涯にわたり書を愛好する心情を育てる」とある。生涯学習を視野に入れれば、書作だけでなく、鑑賞能力を身につけることも大切だ。

大東文化大の書道学科では高校書道、中学国語、高校国語など教職員の免許状が取得できる。これまで、全国の教育現場に卒業生を送り出してきた。そんな伝統もあり、教職を希望する学生が多いが、採用枠の定員などもあり、卒業後の進路は幅広い。

今は、パソコン全能の時代だが、画一的な字体では印象に残りにくい。筆で書いた字は独特の生命感にあふれている。手作りの良さは永遠に消えない。企業や社会の中でも、書を生かせる機会がある。学生には、いろんな職業に携わりながら、生涯にわたって、書と関わってもらいたい。

かわの・たかし　日展会員（審査員）、読売書法会常任理事（審査員）、謙慎書道会常任理事、全日本篆刻連盟副理事長、現代書道20人展のメンバーなど。

●主な必修・選択科目

書道学基礎演習
書に関するあらゆる分野の基礎をオムニバス形式で学ぶ

書道学概論１・２
人間の美意識と感性が育んだ書という造形芸術の本質と意義を考察し、広く書全般を解説する

中国書道史通論１・２
甲骨文、金石文、簡牘、帛書などを取り上げ、篆、隷、楷、行、草の発生、成立、変遷を考える

篆刻法
10種類の印を制作し、篆刻表現の三本柱である字法、章法、刀法を習得する

書作基礎演習１・２
表現技法、臨書法、造形の原理、様式、墨法などを学ぶ

日本書道史演習１・２
日本史に名を残す人物の自筆の書や古筆の魅力を探り、書道史の中で体系的に考察する

漢字作品制作演習１・２
３・４年の連年科目。古典学習から創作へのプロセス、表現力と創作力の深化を図る

仮名作品制作演習１・２
好きな仮名の古典を探し、徹底的に模倣し、技術を自分のものにする

（参照 大東文化大学 CROSSING 2011）

書道を専攻できる主な大学

国立大学

■北海道教育大学
・教育学部岩見沢校芸術課程美術コース書専攻

■岩手大学
・教育学部学校教育教員養成課程学校教育コース
・教育学部芸術文化課程書道コース

■筑波大学
・芸術専門学群美術専攻書コース

■東京学芸大学
・教育学部教育系中等教育教員養成課程（Ｂ類）書道専攻
・教育学部教養系芸術スポーツ文化課程（Ｇ類）書道専攻

■新潟大学
・教育学部芸術環境創造課程書表現コース

■静岡大学
・教育学部芸術文化課程書文化専攻

■京都教育大学
・教育学部学校教育教員養成課程美術領域専攻（書道分野）

■大阪教育大学
・教育学部学校教育教員養成課程美術・書道教育専攻

■奈良教育大学
・教育学部総合教育課程文化財・書道芸術コース書道芸術専修

■福岡教育大学
・教育学部中等教育教員養成課程教科コース書道専攻
・教育学部生涯スポーツ芸術課程書美コース

私立大学

■大東文化大学
・文学部書道学科

■二松学舎大学
・文学部中国文学科書道専攻

■岐阜女子大学
・文化創造学部文化創造学科文化創造学専攻書道・国語専修書道教育コース

■皇學館大学
・文学部国文学科書道コース

■京都橘大学
・文学部日本語日本文学科書道コース

■花園大学
・文学部日本文学科書道コース

■佛教大学
・通信教育課程文学部人文学科日本語日本文学コース

■安田女子大学
・文学部日本文学科書道文化専攻

■四国大学
・文学部書道文化学科

■尚絅大学
・文化言語学部文化言語学科書道コース

＊次号は高校書道特集

「書くよろこび」は、第4号（平成22年2月発行）で、小学校の書道教育に焦点を当てた「書道教育特区」、第5号（23年2月発行）で大学で学ぶ「専門的な書道教育（学科、専修、コース）」を取り上げました。次号は、高校書道を特集します。

手書き文字

人 素晴らしさを語る

千数百年以上の歳月を経ても、その時代の息吹や書き手の人柄が、にじみ出る手書き文字。その素晴らしさや文字と日本人のこころについて学者や文化人、宗教家らに語ってもらった。

言葉は心を耕す

落語家 桂 文珍 氏

芸名の由来は「文鎮」です。師匠の桂文枝（当時桂小文枝）は最初、「『新文枝』はどうや」と。「新聞紙みたいですね」と言うと、「じゃあ、はんなりしてるいう意味で『はん枝』はどうや」。それも半分死んでるみたいやいうわけで、「そや、半紙とくれば文鎮や。『鎮』では重たすぎるさかい、少し、ひょうきんな味出して『文珍』にしよう」ということに。

書道は学生のころにちょっとやったくらいですけど、色紙なんか、よう頼まれるんで、後に残るもんであればちゃんと書いとかんと格好悪い思うて、ここ2年ほど、近所の書道教室に通い出しました。墨をすってる間に心がスーッと落ち着いていく。いいもんですねえ。でも貧乏性なもんやから、心が亡くなると書いて「忙しい」ですが、だんだん出来んようになりましたが。

ワープロやメールが登場して、まだ20年やそこらでしょう。確かに便利ですが、果たして人を幸せにしてるのかと思うんです。人間が本来持ってる知恵が消えていってるような気がするし、浮いた時間を有効に使うてるかというと、余計忙しなってる。メールなんて誰に見られるか分からん危うさもある。

「筆舌を尽くす」いう言い回しがあります。われわれは舌一本で一木一草を表現する話芸の世界に生きている。「舌耕」いうて、人様の心をしゃべる言葉で耕す仕事です。だから、いくら便利なものでもワープロやメールは使わず、あえて手書きにしてます。

「十年日記」をつけてるんですが、この時は気が立ってたなあとか、酔っぱらってるなあとか、文字からその時々の自分の心のありようがわかる。人が書いたものでも、「あの人がこんな字書くんかいな」と、意外な発見があって面白い。人の手のぬくもり、心の動きみたいなものが字に出る。

先頃のチリ落盤事故でも、埋まった人たちが、「われわれは生きている」いうて、ドリルの先にくくりつけて地上に出したメモは手書きだったでしょう。白い紙と筆かペンがあれば電源要らないし充電しないでいい。ある意味、こんな便利なものはない。

落語では字のわからん人間がよう出てきます。「代書屋」もその一つで、三代目・桂春團治師匠のオハコですが、最近、稽古をつけてもらいました。師匠は最後に「これからはこの話を文珍さんなりにやって下さい。私も聞かしていただいて勉強さしてもらいます」と。えらい人です。

まあ「文珍（文鎮）」だけにお墨付きをもらえたんかなあ」と。近いうちにどこぞで、やらしてもらいたい思うてます。

数行でも温かい

京舞 五世 井上 八千代 氏

「命」という文字がとても気に入って、けいこ場に飾っています。ある中国の女性書家が数年前、テレビ番組で対談の後に書いて下さったものです。私の師匠である四世井上八千代の芸に、私は「生命の力」のようなものを感じていて、何か好きな言葉を、ということでこの一文字をお願いしたのです。

私自身は、書は全然ダメです。地方などへ行くと色紙を頼まれることもあるのですが、いつも困っています。たいていは「京舞」という言葉か、その地方へ来て良かったという意味のことを書くようにしています。

日ごろ文字を書く機会といえば、まず手帳や予定表。携帯に入れたりせず、書いて持っていないと心配なんです。次に舞踊の書き付け。舞のフリや歌詞で、覚えなければならないこと、思い出さないといけないことを書き付けておきます。

前回はこうしたけれど今回こう変えたらどうか、とか、あるいは一から覚えないといけないこと。自分で書くことで覚えられるし確認できる。歌詞にしても、印刷やコピーしたものより自分の手で書いた方が手間の分、頭に残りやすいですよね。

あと、人様にお便りしたいなあと思う時。舞の先輩で他流の方ですが、ほんの数行でもインパクトのある字でお便りを下さる方がおられました。すごくうれしかったし励まされた。ああこれはありがたいものやなあ、と。

たとえば「感謝」のひと言だけでもいい、ちょっとお礼状を書くとか季節のお便りをする習慣を付けようとこの数年、思うようになりました。年取って、人の書いた文字の温かみみたいなものを感じるようになったせいかも知れませんね。

数行でことが済むようなハガキを、たとえばお寺を訪ねたときや美術展に行ったときなどに見つけておいて使うようにしています。もらった側も「ああ最近こんな所に行かはったんやなあ」と、何とはなしにこちらの最近の暮らしぶりも伝わります。

メールも使います。特に東京へ行くと、電車や地下鉄、車など乗り物に乗ることも多いですが、電話できない場合でも、用件をメールしておいたら後から見て返してくれる。仕事上の連絡や友人とのやりとりに便利ですね。手書きの良さ、メールの良さ、それぞれ使い分ければいいと思うのです。

“毛筆でこそ”の感動

武庫川女子大学文学部教授 たつみ 都志 氏

父は明治35年生まれ。大学で教えていましたが、常に机の上に硯と筆があって、何をするにも筆でサラサラと書いていました。父より20歳若い母はマジメ人間で、きちっとしたお手本通りの字を書く人でした。

小学校時代、毎年書き初め展がありました。4年生で初めて出品して佳作だったんですが、持って帰ったら母の機嫌がすごく悪い。金賞しか許せないんですね。学校の成績でも何でも金とかAとかが好きな人でしたが、なぜか書道には特にこだわりを持っていました。それからは遊びにも行かせてくれず猛特訓です。以来、毎年金賞でしたが、結局それがトラウマになって書道嫌いになってしまいました。

高校の選択科目ではもちろん取らない。大学で国文科は書道が必修だったんですが、出席の返事だけして教室を抜け出していました。だから大学院で谷崎潤一郎を研究するようになって、手紙や資料を読むのに当初は苦労しました。

パソコンを使い出して逆に筆がいいなあと思い、うちの大学の先生にちょっと習ったりしましたが、あの墨のにおいがダメなんですね。小さいころの記憶がよみがえる。だから手紙など手書きしたいときは愛用の万年筆を使います。

谷崎の書は特に40歳代頃がすごくいいですね。関東大震災後に関西へ逃れて来て、『細雪』を書くちょっと前。松子夫人と出会い、作家としても人間としても一番充実していた時期。エネルギーにあふれている。

谷崎という人は割と事務的な手紙しか書かない人ですが、倚松庵（神戸市東灘区にある谷崎の旧邸）に展示している私が好きな手紙があります。家主と金銭トラブルがあって、家の明け渡しを要求されたのに対するわび状です。

「代わりの家が見つかったら移る」と半分開き直っている。ただの雑文ですが、それだけに何も構えず、心にあるものをそのままさらけ出していて、谷崎という人の息吹きを感じ、鳥肌が立つほど感動しました。いろんな修羅場もくぐり抜けてきて、人生の頂点に立っている。そんな感じが毛筆だからこそ表れています。

今の女子大生、丸文字だ何だと言われますが、小さい頃から書道をやっている子も多いし、書道部は結構人気がある。書道教育も強制すると私みたいになるので、日常の中にどう取り入れていくかでしょう。

パソコンは何度でも更新できるけれど、手書きは頭の中で全体を構築してから書き始めなければならない。一種の空間芸術の感覚で書道をやるといいのかも知れませんね。

パソコンのキーをポンと押せば、字が書ける時代ですが、手書きの文字は一字、一字に気持ちがこもり、緊張感とか、心の軌跡が伝わ

長老

なところが好きなのかも知れません。それで、普及し、長く続いているのでしょう。

私自身、写経以外にも、

ということでしょうか。無心になれば自分の悪い癖を直せる。書にはそんな力もあるようです。

文化の礎 手書き文

著名6人 素晴らしさ

日ごろ文字を書く機会といえば、まず手帳や予定表。携帯に入れたりせず、書い

出さないといけないことを書き付けておきます。前回はこうしたけれど今

認できる。歌詞にしても、印刷やコピーしたものより自分の手で書いた方が

になりました。年取って、人の書いた文字の温かみみたいなものを感じるよ

さ、メールの良さ、それぞれ使い分ければいいと思うのです。

に筆がいいなあと思い、ちの大学の先生にちょっと習ったりしましたが、あの墨のにおいがダメなんですね。小さいころの記憶がよみがえる。だから手紙など手書きしたいときは愛用の万年筆を使います。

谷崎の書は特に40歳代頃

て、日常の中にどう取り入れていくかでしょう。

パソコンは何度でも更新できるけれど、手書きは頭の中で全体を構築してから書き始めなければならない。一種の空間芸術の感覚で書道をやるといいのかも知れませんね。

写経で伽藍を復興

安田 暎胤 薬師寺長老

無心になって 自分見直せる

パソコンのキーをポンと押せば、字が書ける時代ですが、手書きの文字は一字、一字に気持ちがこもり、緊張感とか、心の軌跡が伝わってきます。だから、真心を込めて、お経を写せば仏像を一体、一体、作るのと同じような気持ちになり、本来どんな人でも持っている清らかな心が発見されます。これが写経の功徳です。

薬師寺は680年、天武天皇によって発願された白鳳期の寺院で、「古都奈良の文化財」の一部として世界遺産にも登録されています。でも、1300年余りの間には、幾多の災害に遭いました。享禄元年（1528年）には東塔を残して、すべてを焼失しました。そこで、白鳳伽藍を何とか復興できないものか、と始めたのが、お写経の納経供養料で浄財を募る写経勧進です。

当初、「写経の浄財ぐらいでお堂は建たない」とも言われましたが、理想に向かって永遠に努力するのが宗教家の使命です。1968年に始め、手軽にできるようにと、手本を下敷きにして写す方法なども採用しました。7年目で100万巻を達成。2006年には700万巻を超えました。1人で2万巻以上を書かれた人もいます。この浄財で、金堂、西塔、中門、大講堂、回廊などが再建され、現在行われている東塔の解体修理にも、写経は大きな力になっています。

筆を持って紙に向かうと、気持ちがしゃきっとしますね。日本人はそのようなところが好きなのかも知れません。それで、普及し、長く続いているのでしょう。

私自身、写経以外にも、書を依頼されることがあります。「無事」「平常心」「和」「福寿」などの言葉を書きます。空間や字のバランスなど難しいのですが、依頼された書で、少々「不出来」も自分の真筆ですから可とさせてもらっています（笑い）。

故高田好胤管長の逸話ですが、「稽古してもなかなかうまく書けない」と言われたので、私が「それなら目をつむって書いたらどうですか」と言った。それで、高田管長のほかの書と一緒に、目をつむって書いたものを、書道の大家に見せたら、「これが一番にいい字だ」と言われた（笑い）。目をつむって「無心になる」ということでしょうか。無心になれば自分の悪い癖を直せる。書にはそんな力もあるようです。

ファッションデザイナー

コシノヒロコ 氏

感情を繊細に表現

墨絵や書では何回か個展を開催しています。日本の文字というのはアートだし、芸術ですよ。漢字とかなが一緒になって流れるように、あるいは力強く、あるいははかない感じに、いろんな感情を表現できる。筆と墨を使い、和紙に手で書く。ビジュアル的な芸術性に加えて、感情を非常に繊細に表現できるというのが日本の文字の素晴らしさだと思いますね。

手紙は全部、筆で手書きします。あまり長い文章は書きませんが、季節のあいさつや、ちょっとしたお礼だけでも便せん4、5枚にはなりますね。

もともと私は絵を描くことから出発しているので、文字のレイアウトを考えて、一つの画面の中に絵を描くような思いで字を連ねていきます。

一字一字書いていくことによって、自分の感情を文字にしたためて送り届ける。時々、ほかの方からも墨で書いた手紙を頂きますが、本当にていねいな気持ちが伝わってきますね。

若い頃、文化服装学院に入るために初めて一人で東京へ出てきた時、最初の6か月で胃潰瘍になってしまったんです。休学しなければならず、大阪に帰るのも無駄なので、原雅夫先生のスタイル画教室に弟子入りして、筆を使って瞬時に1分くらいでスタイル画を描くトレーニングを来る日も来る日もしました。

1日平均30枚くらい描いて、6か月を過ぎたあたりから筆づかいのコツみたいなものを覚えてしまった。1本の筆で、布の厚さ、素材感、モデルの脚の肉付きまで見えてくるような絵が描けるようになった。それからですね、絵を描くように筆で字が書けるようになったのは。私にとっては字も絵も同じなんです。そこに言葉があるのが字。

最近の若い人はコンピューターがあるので自分の手で字を書くことをしない人が多い。漢字を書けなくても変換で出てくる。便利な機械に頼りすぎて、自分の持っている人間的な力を生かし切れていない人が多いですね。特に日本の文字の美しさがあるのに、それを手で表現する能力が衰えていくのが残念。

日本に生まれた良さを身につけることが、これから国際人として生きていくためには必要なんじゃないでしょうか。知識だけでなく、「技」として、昔は手習いといって子供の頃から修練を積んだ。だから昔の人は字がすごくうまい。

そういうものを無駄として排除して、合理性だけに走っていては日本人は個性をなくしてしまうと思んです。

歴史地理学者
奈良県立図書情報館館長

千田 稔 氏

「余白の美」神秘的

平城京遷都1300年を記念して平成22年に復元された大極殿には「大極殿」と記した扁額が飾られています。これは誰が書いた文字だと思いますか。奈良時代の長屋王です。長屋王が書いた写経から文字を選び、現代技術を駆使して拡大復元しました。当時を代表する知識人ですから、いかにも、教養あふれる筆致がうかがえます。千数百年経って、その人柄などがにじみ出るのですから、手書き文字というのは凄いです。

東大寺を創建したのは聖武天皇で、正倉院には聖武天皇と光明皇后の遺品がたくさん納められています。二人の字は対照的です。天皇の字がきっちりとして端正、皇后の字は自由でかっ達です。皇后はかなり、行動的な性格で、天皇の背中を押していたのではないかと、私は勝手に推測しています（笑い）。このように、人が書いた文字というのは、それぞれの味わいがあり、面白さが発見できます。

文字は中国から伝来し、その源は絵画的な象形です。日本では弥生時代には字が普及していなかったので、文字の代わりに、土器や銅鐸などに絵が描かれました。だから、日本の文字文化のDNAは絵ではないかと考えています。こうした歴史的な背景に加え、「カミ」に捧げるために、より奇麗なものを書こうとする精神が加わり、美しい文字を書くという文化が生まれたのだと思います。

ですから、書の門外漢である私なりの解釈をすれば、元々、単に文字で情報を伝達するだけでなく、絵画のような芸術性が書には備わっていたと思います。白と黒だけで表現するので神秘的で、「余白の美」というのは一種の空間芸術をつくるのでしょう。現代人が書道にひかれるのは、そんな芸術的な魅力と日本人の美意識が合致したのではないか。

ただ、パソコンが普及した今の時代、手書き文字の文化は、厳しい状況に置かれている。簡単に入力できて、変換キーを押せば、難しい漢字が出てくる。文章も練り直せる。便利なので、ついつい頼ってしまう。でも、漢字が読めても、書けない時代になってきた。これでいいのかな、と思いますね。

自著の出版でサイン会に招かれることがあります。自分の名前は、うまく書けるが、書き慣れていない相手の名前がうまく書けない。普段から手書きになじんでおれば、と思うこともあります。日本の文化だから、奇麗に書きたいですよ。

美しく、元気に書けたよ！

第6回　手書き文字ばんざい！

平成17年、文字・活字文化振興法の成立に基づいて、10月27日を「文字・活字文化の日」に制定されたのを受け、本院では「手書き文字ばんざい！」大会を実施し、毎年大きな反響を呼んでいます。平成22年も10月24日に「第6回手書き文字ばんざい！」を開催しました。例年より多く364人の方々が参加して下さいました。

和気あいあい　書に親しむ

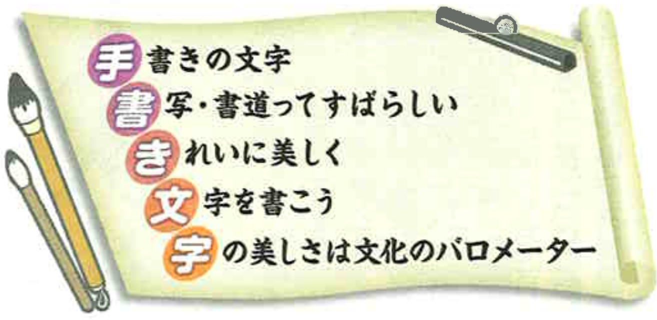
まず最初に本院副理事長の真神巍堂先生による作品揮毫で始まりました。参加者が揮毫される真神先生の周りを幾重にも取りまき息をこらして見守る中、迫力ある筆致で力強く「龍馬」と書き上げ、大きな拍手が起こりました。龍馬は平成22年のNHK大河ドラマの主人公であり、時を得た文字で、より一層に関心を集めたようです。揮毫作品は正面のパネルに展示されました。

次に主催者を代表して中村仁・読売新聞大阪本社代表取締役社長にご挨拶をいただきました。中村社長は「美しい文字を書けるよう頑張って練習し、楽しい一日にして下さい」などと、この大会への期待をわかり易く、熱くお話し下さいました。

主催者幹部の紹介の後、参加者それぞれが色紙の揮毫から実技に取り組みました。色紙に書く本年のテーマは「歴史」です。事前に配布された手本を参考にして書きました。この手本は、年・永・栄・史・古・創・美・道・夢・とし・みちなどの文字を古典から集字して作ったものです。友達同士で「うまく書けたね」「この字は難しいね」などと会話が弾みました。また、付き添って来られたお母さんや先生がアドバイスされたり和気あいあいとした姿がみられました。色紙に書いた作品に本年は名前を書きました。そのうちの1枚は会場内のパネルに展示し、1枚は家に持ち帰り、もう1枚は平成21年から実施した外部展示用として本院で預りました。

これらの作品は11月12・13・14の3日間、NHK大阪放送局1階アトリウムで展示されました。色紙を書き終えた人は平成23年のカレンダーにそれぞれ好きな文字や言葉を墨・絵の具・カラーフェルトペン・クレヨンなどで書いて、オンリーワンのカレンダーを作りました。生き生きと楽しく作っている様子は大変ほほえましいものでした。出来上がったカレンダーを嬉しそうに持ち帰りました。

【主催】公益社団法人日本書芸院、読売新聞社
【後援】文部科学省、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、NHK大阪放送局、読売テレビ
【協賛】あかしや、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、パイロットコーポレーション、ぺんてる、墨運堂（五十音順）



大作揮毫作品（真神巍堂・本院副理事長）

カレンダーを作り終えた人は寄せ書きコーナーへ行き、大きなパネルに好きな文字や言葉を自由に元気よく書いていました。このコーナーは特に子供たちが生き生きとして書いている姿が印象的でした。

次に本年も「第5回全日本小学生・中学生書道紙上展」および「第15回全日本高校・大学生書道展」優秀者による席上揮毫が行われました。小学1年生から中学3年生までの9人と、高校生2人・大学生2人の13人が会場中央に設けられたステージで、元気よくかつ慎重に書いている姿は見ている者に感動を与えました。これらの作品は会場内の大きなパネルに展示されました。一堂に展示された作品を見て参加者から期せずして拍手が起こりました。また、色紙作品と同様に、NHK大阪放送局1階アトリウムで展示されました。最後に本院理事長井茂圭洞先生より閉会のご挨拶をいただき盛会のうちに終了しました。

参加者の声

これからも続けたい／家族で楽しめた

大阪府茨木市・小学2年　佐藤未菜さん（7）「小学1年生から書を習っている。お母さんと並んで書くのは初めて。少し恥ずかしかったけど、楽しかった」

大阪市城東区・小学2年　中村朱里さん（7）「お父さん、お母さん、弟と来た。〝時〟という字は難しかった」

大阪市阿倍野区・小学6年　泉雄喜くん（11）「書道は習っていないので、初めて自分の干支〝卯〟を書いた。100点満点中50点くらいだけど、楽しめた」

奈良県生駒市・中学1年　秋山未奈さん（12）「カレンダーに好きな言葉の〝夢〟を自分の字で書けてすごく良かった。これからも書道を続けていきたい」

神戸市灘区　丹原金吾さん（43）「書道は学生以来で、トメやはらいなど子どもから厳しく指摘されてしまった。家族で楽しめたので、来年も参加したい」

神戸市東灘区　佐藤八磨子さん（46）「12歳になる娘が幼稚園の頃から書道を習っている。親子で並んで書を書くのは初めてで、良い思い出になった。これを機会に書を始めてもいいなと思っている」

※「参加者の声」は平成22年10月27日付読売新聞朝刊から。年齢、学年、学校名は掲載当時。

平成22年　全国シルバー書道展

豊かな人生　筆にのせる

平成22年「全国シルバー書道展」は、大阪、京都、兵庫、岡山など西日本の2府6県で開かれた。大阪展は、日本書芸院が事務所を置くＯＭＭ（大阪マーチャンダイズ・マート）ビルで8月17、18の両日に催され、記録的な猛暑にもかかわらず、2日間で１５４４人が入場した。広島展の１０７歳を最高齢に大阪、京都、兵庫展には１００歳の人も出品。岡山展は昨年より2日長い6日間（9月29日〜10月4日）の開催となった。各会場とも、孫と一緒に訪れる高齢者の姿も目立ち、書道を通じて家族の絆を温めていた。

岡山展には力作が並んだ

864点出品　最高齢は99歳　岡山展

会場は大勢の入場者でにぎわった

天満屋岡山店6階の葦川会館であった「岡山展」（おかやま県民文化祭協賛、第48回岡山市芸術祭参加）を訪ねた。百貨店での開催ということもあり、書道愛好家だけでなく、買い物客や家族連れらが訪れ、6日間で、２５５７人が来場した。

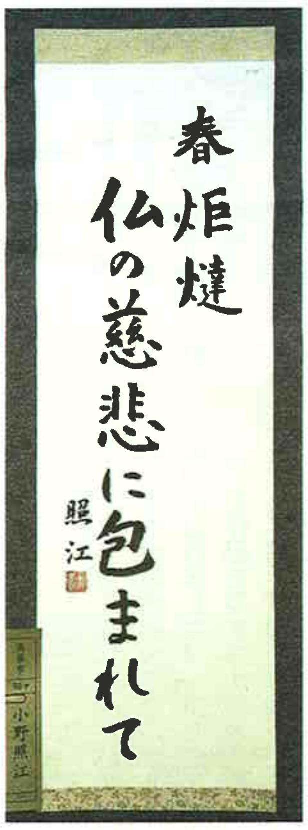
高齢者（65歳以上）の「シルバー展」には、「漢字」「仮名（かな）」など８６４点（男性１１８人、女性７４６人）の出品があった。最高齢は99歳の女性、小野照江さん（高梁市）。男性は96歳の守屋緑葉さん（岡山市）だった。出品者の平均年齢は75・9歳、90歳代は31人、80歳代２３０人。人生経験、社会経験の豊かな人たちが、人柄をしのばせる筆致で、味わい深い言葉や詩文などを書いていた。

小野さんの作品は「春炬燵（こたつ）　仏の慈悲に　包まれて」。ほのぼのとした人間の温もりが伝わって来る。守屋さんの作品は「松樹千年翠」。枯れることのない樹勢を5文字に込めていた。

ほかにも、正岡子規の句を書いた福井ふくよさん（津山市）の「故郷や　どちらを見ても山笑う」、高宮康代さん（岡山市）の「正直の頭に　神宿る……」など、一語一語をかみしめたくなる言葉が、ぎっしりと詰まっていた。

同展実行委員会事務局長の奥田桂峰さんは、「来年は１００歳以上の人にも出品して欲しい。生涯学習として書に取り組み、みんなが元気になってくれれば、書のすそ野も広がります」と話している。

岡山県書道連盟の役員・会員らが飾り付け、会場運営などをボランティアで手伝い、同連盟の重鎮らが、マイクを握って作品の解説をするなど書の普及に取り組んでいる。



最高齢者、小野照江さんの作品

祖父母と孫らが一緒に出品

さなえ展

家族で出品　書が絆つなぐ

一方、孫やひ孫が祖父、祖母とともに出品するファミリーコーナーの「さなえ展」には、13組の応募があった。白居易の言葉「天涼人健」を、かっ達な筆致で書いた吉原宗月さん（倉敷市）、「自然の美」と書いた孫の絵里子さんの作品などが並んでいた。入場者らは「家族の会話が聞こえてきそうだ」「ほのぼのとして、いいね」などと話しながら、見入っていた。

2府6県で開催された「全国シルバー書道展」

第22回広島展	１月６、７日	広島県民文化センター
第23回三重展	２月25〜28日	津リージョンプラザ
第23回京都展	３月５〜７日	京都文化博物館
第23回滋賀展	４月27〜29日	大津市歴史博物館
第22回奈良展	５月28〜30日	奈良県文化会館
第23回大阪展	８月17、18日	ＯＭＭ（大阪マーチャンダイズ・マート）ビル
第23回岡山展	９月29日〜10月４日	天満屋岡山店
第23回兵庫展	10月23、24日	兵庫県立美術館・原田の森ギャラリー

※和歌山展は隔年開催

第15回 全日本高校・大学生書道展

学生書道のグランプリ「第15回全日本高校・大学生書道展」（平成22年）は漢字、かな、調和体（漢字、かな交じり）、篆刻の4部門から計1万1868点の応募があった。最高賞となる全日本高校・大学生書道展大賞に51点が選ばれたのをはじめ、同展賞347点、優秀賞757点などが決まった。いずれも、書芸術の継承と発展を担う若い世代の意欲作で、上位三賞受賞作品計1155点が平成22年8月24日から29日まで大阪市立美術館（大阪市天王寺区）で展示され、期間中、約2000人の入場者が鑑賞した。また、展示会最終日の29日には大阪国際交流センター（同）で授賞式が催された。

大賞51点 次世代担う意欲作

【審査員】（書家は50音順）

読売書法会　常任総務　新井光風
本院　理事長　井茂圭洞
本院　副理事長　今村桂山
〃　杭迫柏樹
〃　黒田賢一
〃　高木厚人
読売書法会　常任総務　樽本樹邨
本院　副理事長　真神巍堂
読売新聞東京本社　執行役員事業局長　久保 博
〃　大阪本社　執行役員事業本部長　窪田邦倫

日時　平成22年8月4日（水）
会場　マイドームおおさか　1階

【審査結果】

個人賞	全日本高校・大学生書道展大賞	51点
	全日本高校・大学生書道展賞	347点
	優秀賞	757点
	準優秀作品	1322点
	優良作品	9391点

出品点数　1万1868点

○種別

第1種	5647点	（日展・読売サイズ）
第2種	5590点	（全紙、半切二幅、聯落）
第3種	631点	（篆刻）

○多数出品都道府県
（上位10府県。北海道から沖縄まで全都道府県より出品がありました）

福岡県	1160点
熊本県	1016点
京都府	971点
新潟県	966点
大阪府	950点
岩手県	848点
鹿児島県	579点
埼玉県	534点
東京都	515点
奈良県	429点

○参加団体

高校	6314点
短大・大学	1987点
関東・中部会派	398点
専門学校・個人出品等	326点
本院会派	2843点

第16回 全日本高校・大学生書道展（予告）

【作品受付】平成23年6月30日（木）締切　※同日消印有効
必要資料をご請求の上、作品とともにお送り下さい。
【会　　期】平成23年8月23日（火）～28日（日）
【会　　場】大阪市立美術館 地下展覧会室 全室（天王寺公園内）
【主　　催】公益社団法人 日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省（申請予定）
◇陳　列　大賞・展賞・優秀賞を陳列します。（約1300点）
◇授賞式　展覧会最終日に授賞式・祝賀パーティーを開催します。
■作品応募要項の詳細はホームページでご確認下さい。
（平成23年4月以降）

詳細はホームページで

「全日本高校・大学生書道展」「全日本小学生・中学生書道紙上展」の今年の作品応募要項や、昨年の詳しい結果報告は、下記ホームページをご覧下さい。

「全国シルバー書道展」
「全日本高校・大学生書道展」
「全日本小学生・中学生書道紙上展」事務局
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階　公益社団法人 日本書芸院内
電　話　06-6945-4501
ＦＡＸ　06-6945-4505
Eメール　info@nihonshogeiin.or.jp
http://www.nihonshogeiin.or.jp/

第５回　全日本小学生・中学生書道紙上展

全国から応募１万7334点　若い力はじける

小、中学生の書写書道の技術向上を図り、書くことを通じて豊かな心を養うことを目的に、本院と読売新聞社が平成18年に創設した「全日本小学生・中学生書道紙上展」の第５回審査（22年）が行われた。今回は、全国から１万７３３４点の応募があり、各学年ごとに「ベスト１００」作品が選ばれた。力いっぱい堂々と書いた秀作が多く、学年によっては選出数が１００を超えた。小学校６学年、中学校３学年で計９１９人が受賞し、「ベスト１００認定証」などが贈られた。

【審　査】
日　時　平成22年９月27日（月）
会　場　ＯＭＭビル２階　会議室
審査員　本院理事長　井茂圭洞
本院副理事長　杭迫柏樹
〃　黒田賢一
〃　今村桂山
〃　真神巍堂
〃　高木厚人
読売新聞大阪本社　執行役員事業本部長　窪田邦倫

【選考内容及び賞】
一、全作品から各学年優秀作「ベスト１００」を選び認定証を授与。
二、図書カードは各学年「ベスト１００」及び成績優秀者に贈る。
ただし、団体出品の場合は代表者を通じて送付。

【成績発表】
11月14日（日）。読売新聞紙上及び本院ホームページにて発表、各代表者に成績通知を郵送。
ただし、団体出品の場合は代表者を通じて送付。

出品点数　　１万7334点

○学年別

小学１年生	858点
小学２年生	1661点
小学３年生	2409点
小学４年生	2773点
小学５年生	2830点
小学６年生	2658点
中学１年生	1672点
中学２年生	1384点
中学３年生	1089点

○団体別

小学校	37点
中学校	161点
本院会派	１万2633点
書　塾	4090点
その他	413点

「書くよろこび」を無料でお届けします

「書くよろこび」は、書くことのよろこびや楽しさを広く一般の方にアピールし、書写書道のより一層の振興と発展を目的とした無料の広報紙です（年１回発行、55万部）。

書道教室や部活動、展覧会場など、書や文字に関する様々な場面で配布、活用していただいています。

送料無料でお届けいたしますので、ご希望の部数と送付先を日本書芸院事務所へお申し付け下さい。お待ちしています。

第６回　全日本小学生・中学生書道紙上展（予告）

【作品受付】平成23年８月31日（水）締切　※同日消印有効
【出品資格】小学校・中学校の児童・生徒
（平成23年８月31日　作品受付締切時）
【部　　門】小学１年生の部から中学３年生の部まで、各学年を部とします（９部門）
【主　　催】公益社団法人 日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省（申請予定）
■作品応募要項の詳細はホームページでご確認下さい。
（平成23年４月以降）

伝統と創意

公益社団法人　日本書芸院

■ 展覧会
＜日本書芸院展＞
日本書芸院社員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。
●日本書芸院展(役員展)　　会場：大阪国際会議場（大阪市北区）
●日本書芸院展(公募展・社員展)　会場：大阪市立美術館（大阪市天王寺区）
●特別企画展・海外展
＜その他の企画展＞
小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催して、書の啓蒙と普及、我が国文化の継承・振興・発展のために活動しています。
●全日本小学生・中学生書道紙上展　読売新聞紙上
●全日本高校・大学生書道展　会場：大阪市立美術館（大阪市天王寺区）
●全国シルバー書道展　近畿２府４県および三重・岡山・広島県で開催

■ 沿革と概要
昭和21年（1946年）11月創立
昭和22年（1947年）５月、社団法人の認可を受ける
平成18年（2006年）創立60周年を迎え、平成22年（2010年）６月に公益法人制度改革により、内閣府から公益社団法人の認定を受けた
■現在、北海道から沖縄まで全国に１万５千人を超える社員を擁する我が国屈指の書道団体であり、社員の中から、文化勲章受章者２名（故 村上三島、杉岡華邨）をはじめ文化功労者、日本芸術院会員、日本芸術院賞受賞者、日展や読売書法展など全国規模の大公募展の役員・審査員を務める著名な書道芸術家を多数輩出しています。
■毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催しています。

■ 講習会
●記念講座
●教養講座
●「手書き文字ばんざい！」
（文字・活字文化の日記念イベント）

■ 出版
●作品集・図録
●会報
●研究誌・記念誌
●広報紙